……詞　華　集……

幻桃157号より

植松　悦子選

手づくりのまっ赤な鼻緒の布ぞうり素足で歩む夏はもうすぐ　蛭間　和子

散りぎわの山桜ああ舞い狂うやわらな片(ひら)のつぶてのように　杉原たか子

引き揚げの船は大型客船で名前も知らずただ揺られゆられて　江口マサミ

はるばるととおき時よりいただきしこの身体なりこの命なり　杤原　勝子

栴檀の紫の花の鈴なりを見んと二階へ二か月ぶりに　橋本　淑子

彼方から届いた手紙のように咲く白木蓮は空のみを見て　大平　千歳

来年も咲かねばならぬ憂鬱を秘めて散りゆく堤の桜　薮内津奈子

ふたたびを耕すことなき田や畑にソーラーパネル月光映す　徳永　妙子

極寒という武器持ちて南極は世界で無二の平和を保てり　中垣　健志

巡行の提灯点す十三両　車輪軋ませ軸(やま)動きだす　柴田　秀子

豊かなる川の流れを窓外に法要すみしのちのひととき　棚橋　好江

ああ暑い心頭滅却うんぬんも無理むりムリと喫茶でアイス　市川きよ子

平和とはかようなことを言うのかな自転車に散る梅の花びら　三崎　静夫

四歳のしんちゃん言葉の摩訶不思議とどめおきたしあれもこれもを　篠田　理恵

母の日を待ち兼ねしごと芍薬の真紅の花の艶やかに咲く　髙本　洋子